不思議の国とありす

さくら飴.com

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
不思議の国とありす

【Ｎコード】
Ｎ１３６２Ｑ

【作者名】
さくら飴．ｃｏｍ

【あらすじ】
『あの話を信じますか？』

そう問われて、手を差し伸ばされた。
伸ばされた手に触れた瞬間、あたしは穴に落ちた。

こんな仕掛け穴…どうやって掘ったのかしら？というか、私有地に勝手に穴を掘るのはいけないことなのよ？
で、このお話の舞台の主人公は母だったのでしょう。あたしを主人

公にしてどうするつもりなの？

その１　穴に落ちる

「あの話を信じますか？」

突然、目の前に現れた白いうさ耳をつけた怪しい男に言われた一言。
なんの考えもなしに答えた返事から、まさかあんな目に会うとは思いもしなかった。
いや。心のどこかでは分かっていた。
あぁ。これでやっと脇役から解放されて。あたしは主人公になるんだ。と。

ー不思議な国とありすー
その１　『穴に落ちる』

自分はどこにでもいるような女の子といわれる物だった。
人間という物。
姉のような美人でもなく、その姉に恋をしているちょっとイケ面な家庭教師の淡い恋物語の妹という脇役。
別にそれでも良かった。…と思ってる。
姉は好きだったし、オクテの家庭教師をからかうのも楽しかった。
勉強も嫌いじゃなかった。
だけど、目の前にいかにも怪しいうさ耳をつけた男が現れたら、そうも言ってられないでしょう？

「信じてあげてもいいけど。その『あの話』というのを聞いてみないとわからないわ。」

今日はオクテの家庭教師も来ない。なぜなら、頑張ってあたしが姉とのデートをセッティングしてあげたからだ。だから、今日はあたしと使用人、あとその辺で「ここはどこ？まだあのワンダーランドから抜け出せないの？ここは私の国じゃない。助けて」と狂言を言って使用人を困らせてる女がいるくらい。

「自分の母親を狂言女とは。あなたも酷いですね。」
「そんなこといっても、あっちが娘と認めてくれないんだから仕方がないじゃない。」
「そうですか…。では、あの狂言女の話が本当だったら。あなたは信じますか？」
「あんた…人の親を狂言女なんて、良く言えたわね。あと、勝手に人の文章読まないでくれる？」

うさ耳男はメガネの縁を光らせて笑った。
うさんくさい。うさ耳の時点で変態だと思ったけど、笑うと更に変態っぽかった。

「そうね。信じてもいいけど。あの女があたし生んだのは紛れもない事実だわ。」
「そうですか。そうですね、あなたを生んだのは紛れもないアリスです。そして、ここは紛れもないあの人の国だ…。ただ、帰ってくる時代を間違えてしまったのですね。」
「時代？」
「えぇ。さぁ、行きましょう？」
「は？」

突然、なにを言いだすんだ？この変態は。行きましょうと変態が差し出した手と顔を交互に見てしまった。そのときに気付いたのだが、

この変態…なかなかのイケ面だった。
あぁ。違う。そんなことを思っている場合じゃない。
差し出された手は間違いなく、あたしに向けられている。なんせ、差し出されたのだから。
では、この手はあたしが取るべきなのだろう。
おそるおそる、その手に自分の手を重ねようと伸ばした。
そして、手が触れたと思った瞬間。

あたしは、穴に落とされた。

穴はとても深いようだった。なんせ、落ちているというのが今も分かるからだ。
変態はあたしの手をにぎにぎと感触を確かめるように握っている。本格的に変態っぽい。この手をとってしまったことを早くも後悔している。

「そろそろ、その変態という敬称を辞めて頂いても？」
「あら？また人の思考の文章を読むなんて変態としか思えないわ。その手の握り方も。耳も。」
「これは、本物の耳なんです。ほら、あなたのように顔の横には耳がないでしょう？」

そういいながら本来、耳のある場所の髪をかきあげると、本当に耳がなかった。
顔の横に耳がないとは、机で物書きをするときに髪が邪魔だろう。
それに、なんだか…

「気持ち悪いわ。かきあげる動作も、耳がないのも。」

いけない。もしかしたら、耳が頭にあるのはこの人のコンプレックスかもしれない。それに、広い世の中だもの。耳のない人間なんて結構いそうだわ。ともかく、人のコンプレックスを公言するなんて最低だったわ。そう思ったからワザとらしくバツの悪そうな顔を出した。

しかし、変態はそんなことは気にしてもいないように笑っていた。なんだか、ワザとらしくバツの悪い顔をしたのが馬鹿みたいじゃない。

「あなたは母親ととてもよく似ている思考のようだ。」

この変態は、母親と知り合いのようだ。

「そう、母親だもの。似るのは当然なんじゃないの？」

変態は声も出さずにまた笑った。

笑った顔もかっこいい。

「私の名前は白うさぎ。うさぎさんと呼んでくだされば幸いです。」

こうして変態はうさぎと名前を変えることになる。

あんまり、変態とかわらないのではないかと思ったのは内緒でもなんでもない。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n1362q/

不思議の国とありす

2011年1月16日05時57分発行